

本 会 議

歓迎の辞

ホストクラブ会長 猿田慎男



本日は、IM（インターシティミーティング）に御出席いただきありがとうございます。

今年は、阪神、淡路、大震災より十年目にあたります。又、今年に入り全国でも震度5以上の観測が7回以上もあり、各地で地震の被害や、異常気象による台風、大雨による災害など甚大なる被害が発生しております。

生しております。

又、海外でも、インドネシアでの大津波、アメリカでのハリケーン、昨日は、パキスタン周辺での大地震により日本人を合わせ二万八千人以上の犠牲者が出ている最新のニュースが伝えられるなど世界的な災害の危機に直面しているのが現状です。

我々も、いつどこで災害に遭うかもしれないという恐怖感を持つ方々は少なくないと思います。そこで、我が南西ロータリークラブにとっても一番思い出深い活動となりました阪神、淡路大震災の救援活動の経緯を含み、本日のテーマを「災害時、その時あなたは何か出来ますか」として皆様方と共に災害について考えていきたいと思っております。そこで、少しだけ十年前の救援活動についてお話したいと思っております。

当クラブにも何か出来るかという話し合いがもたれ、一人数千円の災害義援金を募る事になりましたが、私は遠く離れた地であるならともかく、近隣の神戸、西宮、淡路が大変な時に、義援金だけでいいのか！是非とも救援活動を行いたいと申し出ました。すると即座にクラブ全員の賛同を受けることが出来たのであります。その時の感動は今でも忘れる事は出来ません。

私は、この時、ロータリーに入会させて頂き本当に良かったと思っておりました。その夜、帰宅してからその事が嬉しくて、一番に家族に話をした事を今でも鮮明に覚えております。

その後、各クラブ員の役割を決め、トラック二台と乗用車二台の計四台に水と救援物資を満載し、堺市役所から通行許可証を受取り、朝五時に集合して神戸を目指したのです。西宮に入るとあたりの景色が一変してきました。道の両側には食料や物資を山ほどかかえ

ながら、もくもくと歩いている人々の列が延々と続いていました。戦争を知らない私は映画に出てくる戦争中の一場面を見たような気分させられました。大渋滞の中、信号のない交差点では交通整理をしながら前進し、ようやく十時間かけ神戸市役所にたどりつきました。役所の中は、全国から寄せられた救援物資が山のように積まれていましたが、それらを一番欲しがっている現地におくる手段と人手がないのが現状でした。そこで、我々は対策本部の方と協議して今まで何の救援物資も届いていない地区に直行して物資を届けに行く事にしました。震災に遭われた人々が整然と列を作り、我々が運んだ水をヤカンや鍋にまで注ぎ、礼を言って帰っていく姿を見て、我々南西クラブの一人一人が真の奉仕の喜びを体感したのであります。

帰途には、又、十時間を要した為、私達の食料が底をついたのでヘルメットや腕章をはずし支援に行った我々が、被災された方々と一緒に配給の列に並び、少し笑えるエピソードが生まれてしまったのであります。

さて、本日の基調講演をしていただく貝原俊民様は、まさにその時、兵庫県知事として救援活動の指揮にあたられていました。本日はその時の貴重なお話を伺うことが出来ると思います。更に、本日のテーマを基に、お話いただくパネリストの皆様、ガバナーの平尾様をはじめ我々を支えて下さいましたガバナー補佐様、ゼネラルリーダーの水田様に、この場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。

どうか、短いひとときではありますが、この度のIMを今後の有意義な機会として、いつも心の片隅に大災害時における心の準備をして頂き、ロータリアンとして地域の奉仕に努めて頂ければ幸いです。

なに分にも弱小クラブでありますので、IM開催にあたり、色々な面で、不手際の数々をお許し頂きたく思います

最後になりましたが、IMに出席頂きました皆様方に、心より敬意を表し、歓迎の言葉とさせていただきます。

ガバナー挨拶

RI 第 2640 地区ガバナー 平尾寧章



歴史ある堺の皆さんご本日のIM参加苦勞様でございます。

今、会長様から私のいうことをすべてお話していただきました。

この1年を振り返りますと、日本でも福井の水害、新潟地震、外国でも大津波、カトリーナハリケーンなど本当に大変な1年でした。ロータリーとしても皆さんに義援金をお願いし

たり、本当にご協力をいただいております。

私は海南の生まれでございます。ちょうど5歳か6歳のときに南海大地震に遭いました。その時に津波がきました。夜の2時頃でございましたけれど近所のおばさんが私をおんぶしてくれまして山のほうに逃げたのですけれど、夜が明けまして、山のふもとの私の家のお手伝いさんの家でオカユさんを食べたのを覚えております。家に帰ってきましたけれど、まだ水は床下に溜まっておりました。そして718大水害、有田川と日高川が氾濫しましてたくさんの死者が出ました。先日御坊RCへ公式訪問に行った際718水害を思い出しました。九州へ先日の台風は逃げたのですが、九州への義援金を集めたとお話もございました。

災害が起きたとき自分の身を守るべきは当然といたしまして、「そのとき何が出来るか」今日は前兵庫県知事の貝原さんのお話をお聞きしまして、今年のRIテーマ“Service Above Self”について何かヒントを得、何か持ち帰って非常のときに備えたいと思います。少人数の堺南西RCの皆さん本当にご苦労様でございます。水田ゼネラルリーダー、そして3人のガバナー補佐の皆さん、こんな立派な会場でIMを開催していただきありがとうございます。

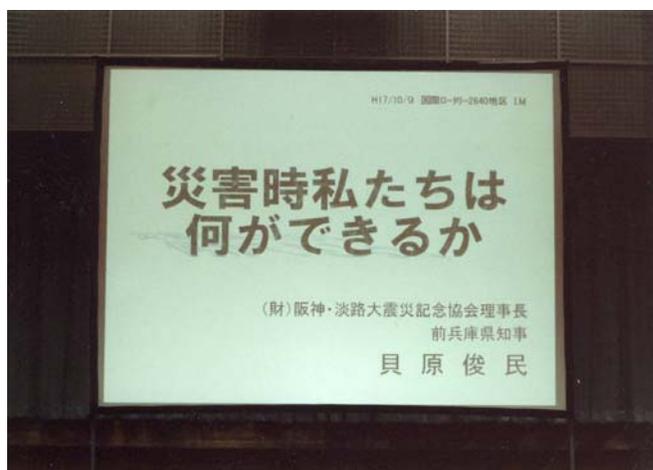
今後ともロータリーの活動にご協力賜りますようお願いして私の挨拶を終わります。ありがとうございました。

基調講演

『災害時私たちは何ができるか』

(財) 阪神・淡路大震災記念協会理事長
前兵庫県知事

貝原俊民氏





「救助の80パーセントが自助である」

基調講演の内容につきましては各クラブ1枚当てDVDで配布いたします。

パネルディスカッション

テーマ 『災害時、その時あなたは何ができますか』

コーディネーター	IMB 組ガバナー補佐	岡本勝士
パネリスト	堺南 RC	亀田英明
	堺東南 RC	武田耕道
	堺西 RC	松岡 晋



【岡本】

“Service Above Self”、日本語では 『超我の奉仕』が本日のインターシティミーティングのテーマです。これはRIの本年度テーマでもあります。

なければならないにこしたことはないのですが、予期せぬ中で多くの奉仕の機会を提供してくれるのが災害だろうと思います。『ロータリアンの皆さん、そのときあなたは何か出来ますか』を問いかけてみよう和本日の副題『災害時 その時あなたは何か出来ますか』をばせていただきました。

【武田】



自己と他者、自分と他人、という視点から、「超我の奉仕」と「自助・共助」についてお話致したいと思います。

『華嚴経』の中心思想のひとつに、重々無尽帝網の教えがございます。帝網とは帝釈天の網、つまりインドラ神のネットのことです。インドラは古代インドの神話ヴェーダの最も

有力な神様でしたが、仏教に取り入れられて梵天様と共に仏法を守護する神とされました。仏教神話においては、忉利天（三十三天）の主とされ須弥山頂の善見城に住み、その宮殿には網が張りめぐらされ一つ一つの結び目には宝珠が付けられていて、その珠玉が相互に映じ合い次から次へと無限に反映していると説かれています。人間をはじめ多くの存在が、相互に関係しあい重々無尽に結ばれていることを比喩的に教えています。華嚴思想の法界縁起の世界を巧みな喩えで表明しています。

奈良東大寺の三月堂（法華堂、羅索堂）には、須弥壇の左右に天平時代の梵天様と帝釈天様が立っておられます。

『銀河鉄道の夜』や『風の又三郎』の作者宮沢賢治には、『インドラの網』という小品がございます。終わりの部分に次のような美しい心象風景が描写されています。角川文庫本より引用させていただきます。

「あなたたちと一緒にお日さまをおがみたいと思ってです。」

「そうですか。もうじきです。」三人は向うを向きました。瓔珞は黄や橙や緑の針のようなみじかい光を射、羅は虹のようにひるがえりました。

そして早くもその燃え立った白金のそら、湖の向うの鶯いろの原のはてから溶けたようなもの、なまめかしいもの、古びた黄金、反射炉の中の朱、一きれの光るものが現れました。

天の子供らはまっすぐに立ってそっちへ合掌しました。

それは太陽でした。厳かにそのあやしい円い溶けたようなからだをゆすり間もなく正しく空に昇った天の世界の太陽でした。光は針や束になってそそぎそこらいちめんかちかち鳴りました。

天の子供らは夢中になってはねあがりまっ青な寂静印の湖の岸砂の上をかけまわりました。そしていきなり私にぶつかりびっくりして飛びのきながら一人が空を指して叫びました。

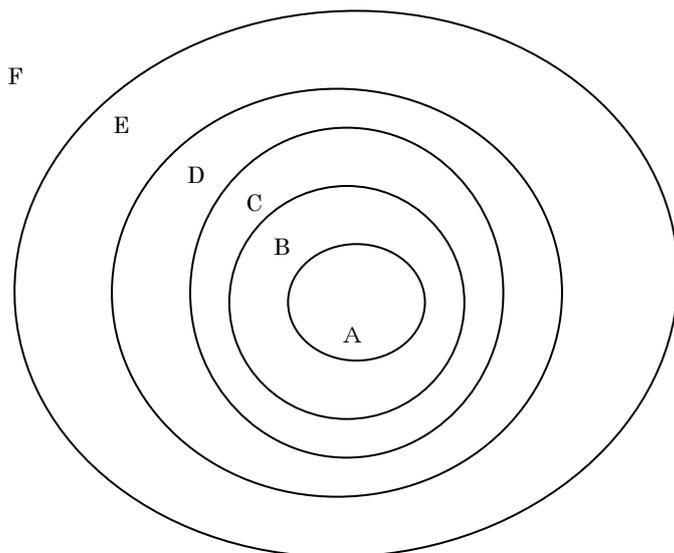
「ごらん、そら、インドラの網を。」

私は空を見ました。いまはすっかり青ぞらに変わったその天頂から四方の青白い天末までいちめんはられたインドラのスペクトル製の網、その繊維は蜘蛛のより細く、その組織は菌糸より緻密に、透明清澄で黄金でまた青く幾億互に交錯し光って顫えて燃えました。・・・・・・

このインドラの網の比喻をヒントにして超我の奉仕について考えてみたいと思います。『超我の奉仕』「五重まるの輪」をご覧ください。自己存在の〈我〉を自覚的に確立し、自己に対する眼差しとエネルギーを周囲の世界に拡大させる、つまりAより順次にB, C, D, E, さらにFの世界恒久平和へと奉仕の心を広げる、そして一步一步、理想世界の実現へ向けて前進して行かなければならないと思います。この〈我〉を網の結び目 (knot) の珠玉と想定すれば、ひとりの〈我〉の輝きは、となりの〈我〉に反映し相互に奉仕の心の玉が磨かれ合い、美しい光明の輪が幾重にも拡がって行くものと確信しています。

災害が起きれば、私には何ができるか、という問いにはほとんど答えることができません。右往左往するだけでどうしてよいものかと迷います。いろいろ考えますが、やはり日常の心の準備と具体策の実践が大切であり、減災社会の実現の第一歩だと思います。個人の自覚と心構えに根ざした自助を土台にして、町内会・校区等地域コミュニティによる共助と行政による公助とが、相互一体的に機能していけば、災害は少しずつ軽減されていくものと考えます。

『超我の奉仕』「五重まるの輪」



- A 自己存在=我 B クラブ奉仕 C 職業奉仕 D 社会奉仕
E 国際奉仕 F 世界恒久平和

【松岡】



平成7年1月発生した阪神淡路大震災の時、西宮で経験したことを踏まえて考えて見ました。

まず、震災の起こった当日を振り返ってみますと、午前6時前に起こった地震を自宅の富田林で感受しました。その時は、大きな地震だなぁと思ったくらいですぐ車出勤。西宮の

今津の薬局へ向かいました。車のテレビを見ながら徐々に大きくなる災害を見つめながら、高速の閉鎖を受け、臨海道路から国道、43号線に入ると、道路状態が一変しました。

道路が大きな段差が出来、通行もままならぬ状態でした。午前6時家を出発し、9:30頃西宮の薬局に到着。シャッターを開けると、前面のガラスがいっせいに落ちてきました。17mの前面窓ガラスは全くダメになっていました。しかし不思議なことに調剤室とコンピューターは無傷の状態でした。ガスの臭いがあり、元栓を探し119番に連絡。ここで落ち着いて回りの状態を見ると、近隣の病院にはすでに14~15の遺体がリハビリテーション室に安置され、救急重症患者を優先治療で、テンヤワンヤの状態でした。しかし、私の近辺の状態は少し分かりましたが、さらに大きな被害が起こっていた事は全く把握できませんでした。

この事から 1. 現地までの交通路の情報の少なさ。

2. 現地の情報の極限化あり。

1)、2)の事から、客観的に判断できなくなる、危険性があること又上記のことから

A) 発生時にすべき事

- ・ 生命の確保
- ・ 安否の確認
- ・ 生活の確立

となると思われる。発生時に現場のロータリアンが職業に応じて(例えば医者など、医療従事者)の個人的奉仕活動、緊急情報網による安否の確認に対する、緊急情報活動等、個人にたよる奉仕が主体となると思われる。

次に

B) 状況の把握後(必要な事、充填すべき事の判断)

- ・ 必要な専門職の召集、派遣(人的労カボランティア活動)
- ・ 必要な物資の送付は、送り先の選択、金銭送付の内容の選択等、現地ロータリーとの綿密な連絡が必要。

C) 継続及びフォローすべき事

- ・ 生活上のコンサルトと精神的支え(避難場所への慰安訪問)

- ・ 選択的金銭援助の継続
- ・ 雇用促進

等が考えられる。

上記の事から、ロータリーとしては、地域の行政と連絡を密にし、計画的に継続していく必要性を感じる為、災害時の専門委員的なものを設定し、災害対策の専門委員の養成と継続するロータリー災害時のファンドの設立を提案して終わります。

【亀田】



災害を精神科医の立場で考えると、次のようなことが言える。

身の回りに発生する災害には、台風、地震、洪水、津波、火災、航空機、船舶、列車、自動車、戦争、テロ、犯罪、等が起こっており、その実態は規模や内容が多彩を極め、

対策を考えることは難しい。学校教育にも馴染まず。実際に経験することが最良の学習になる。

災害の特徴を救助する側からまとめると、被災者は一度に出ること。十分な態勢が出来ていない。学んだことがその通りには通用しない。今すぐしなければならない。今まで経験したことがない。

災害救助の特徴をまとめると、教わっていないことをしなければならない。自分で判断しなければならない。感情的に過剰な反応を示す人より、冷静に対処できる人がよい。時にトリアージュTriage（傷病者の優先順位付けをする）が必要になる。

災害救助の難しさには、被災者だけでなく救援者側にも問題が発生することである。一所懸命にすればするほど、自分の限界に突き当たり、燃えつき症候群に陥ることである。そのような人を早く見つけ、休ませたり、任務を交替させる必要がある。そこには統括責任者の存在は不可欠である。作業の整理、分担、スケジュールの作成も必須項目となる。

被災者の精神的援助にも大切な骨がある。被災者の強さを褒めるようにする。前線に近い場所で治療するほど喜びが大きい。嘘や気休めは言わない。家族には早く会わせる。恐怖体験を言葉にして聞いてあげる。援助は具体的に、常に新しい情報を提供する。働ける被災者は参加させる。救援者にバッジ、腕章を付けさせ、安心感を与える雰囲気大切に

する。災害救助対策を立てる前に、心構えが必要である。 救援計画を統括する人が複数必要である。

災害救助の疑似訓練は、組織の流れとサービス供給のテストから問題点を予め知ることに役立つ。

ビデオ学習から、救援チームに適しているかどうかを選別することも役立つ。空襲体験、地震体験、台風体験、津波体験、火山体験、等体験話を聞くことも大切である。

以上の話をまとめると、人間の命には限りがある。地球は危険な場所である。機械は事故をする。

人間の考えには絶対正しいというものはない。このような世界で人生が営まれるのである。災害救助も“人の生きる営み”ということができる。生きる営みを“アート”のレベルに高めることは大切なことである。

前兵庫県知事・貝原俊民氏の講演で、最後にノアの方舟の話があった。障害者1人と3人の人がいて、津波が発生した。ノアの方舟に4人乗ると逃げるのに30分掛かり、全員死んでしまう。3人だと10分で逃げられて、3人は助かる。この問題は各人で考えて欲しいと締め括られた。パネルディスカッションの時、コーディネーター・岡本勝士氏が会場に、2つの選択肢について挙手を求められた。3人で逃げる選択肢には後方の席で15人ほどが手を挙げられた。私は、災害救助は生きることが究極の選択肢なので、生きることの尊さを実感しないと選択できない道のように思う。

【岡本】 まとめ



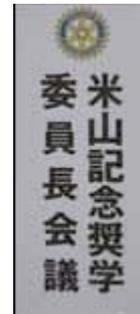
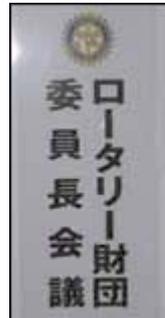
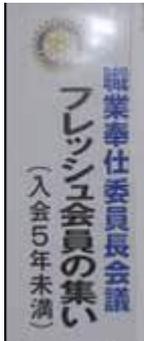
短い時間の中ではございましたが、社会奉仕の哲学『超私の奉仕』に根ざしたロータリアン個々の日常の心構えの再確認をしていただくとともに、「市民と一体となった第2640地区独自の防災ネットワーク作り」と言うお話が出てまいりました。災害時の奉仕は、起きてからではなく、常日頃の心構えがしっかりしていないと対応は難しいと言うのが、3人のパネラーの皆さんの共通のご意見だろうと思います。

具体的なところでは、松岡さんからお話のありました、緊急災害時の専門委員会設置、東南海地震を想定した地区基金創設なども、日常の意識を高める上でも、検討に値しようかと思えます。ガバナー、いかがでしょうか？

少し、個人的な意見を挟みますと、災害時のニュースなどを見ておきますと、多くの若い人たちがボランティア救援活動に参加される姿が映っております。ロータリーにはライラ委員会、インターアクトなど青少年育成プログラムがございますが、これらのプログラムと緊急災害時の専門委員会との連携というのも、ボランティア教育、広報活動の面からも意義あるものにならないかと思ったりしております。

3人のパネラーの皆さん、貴重なご意見ありがとうございました。会場の皆さんご協力ありがとうございました。これをもって、パネルディスカッションを終わります。

部門別会議



総評

ゼネラルリーダー 水田博史



本年度第8組のIMは、「超私の奉仕」をメインテーマとし、今日地震・暴風雨等による自然災害時に遭遇したとき、我々に何ができるかということを考える時宜を得た課題を副テーマとして、実施されました。

基調講演では、阪神淡路大震災時に、兵庫県知事としてご苦労され貴重な体験をされ今日財団法人 阪神淡路大震災記念協会理事長を務められている貝原俊民様にご講演をいただきました。

そしてその後のパネルディスカッションでは「災害時、その時あなたは何かができますか」と題して討論をしていただき、今日やかましく言われている、いつ襲われるか分からない災害に対する心構えを喚起された内容でありました。何を考えどのような行動をとるべきかを学んだIMだったと思います。災害に対する備えをすることを今、更に一人一人が実行することをお互いに考えさせられました有意義なIMだったと思います。

最後に、このIM実施にあたり堺南西RCのメンバーそして3人のガバナー補佐の皆様が積極的に行動されたことに深く感謝申し上げます。

次年度ホストクラブ

堺フェニックスRC

2006年11月18日（土）

於：リーガロイヤルホテル堺